

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(史的研究)

山本 佐和子

今期、日本語の史的 연구のうち、特に文法史関係は個人の新聞書に乏しかった。新型コロナによる研究環境への影響が遅れて現れたものと思われる。一方で、学会誌や紀要等で注目すべき特集が組まれたほか、論文集も引き続き充実していた。

目に止まったのは、歴史語用論の観点や対照研究の手法を用いて、言語変化の要因に迫る研究である。青木博史氏「語用論と日本語史研究—「評価の意味」をめぐる—」(『日本語学』41-3)は、使用される場面における意味から言語変化の要因を説明する「通時的語用論」について事例を掲げて紹介する。同氏「抄物資料による日本語史研究の展望—歴史語用論の観点から—」(『国語国文』91-11)は、国語学の抄物研究が、社会・文化との関わりから文献資料を読み解き、共時的な言語体系の詳細を明らかにする「語用論的フィロロジー」の一環であったことを指摘する。

歴史語用論を観点とする論考では、深津周太「否定的文脈に用いる「何が／何の」の史的展開」(『日本語文法』22-2)が、両形式の対話場面での意味を詳細に観察して、反語用法から否定明示の副詞用法が生じ、「何の」が否定応答表現に進出する過程を鮮やかに描く。ただし、「何が」に否定明示の副詞用法が生じているかは疑問が残る(例とされた(8b)は「何しろお濃茶のようなものは、お代わりしたいと言ったらいけませんよ」)。また、酒井雅史「対照方言学的観点からみた存在表現の歴史変化の様相」(『日本語文法史研究』6)は、『読みがたり各県のむかし話』を、「むかし話を語る」という言語生活の一場面での言語使用の資料と捉え、現代語では表現効果のために存在動詞が選択されることを指摘する。対照研究では、衣畑智秀「日本語疑問文の歴史変化」(『日本語の研究』18-1)が、中世語の疑問詞疑問文の助詞ゾの扱いが不明ながら、現代語と中・近世語の対照により、現代語の助詞カの〈一問いかけ性〉を指摘する。

文法史研究が変化の要因を言語使用の場面に求めるようになったことで、個々の用例をより精確に史の変遷上に位置づけるために、文献の社会的・文化的背景への関心が高まっている。今期、『キリシタン語学入門』(八木書店、3月)、『国語国文』91-11,12「後期中世語特輯」、日本語学会2022年度春季大会シンポジウム「文献資料を読む」等、資料研究の報告が相次いだのは、その要請に応えるものとみることでもできよう。

ただ一方で、文献の社会的・文化的背景の把握以前に、現在、必要なのは現代語訳かもしれない。筆者も専門とする中世後期～近世の文献には、伝統的に現代語訳は作られてこなかった。当期の文献に多い、特定の位相・文体や文芸を想起させる表現を区別したり、同時代の読者には共有されていた社会的・文化的慣習を読み取ったりすることが、現在の文法研究者には困難なことを窺わせる例が散見された。これらは用例の解釈に直結し、読み取れないと変化の方向性も見誤ってしまう。本学会のように、文献資料の言語をまずは等しく表現と捉えて、言語の史的变化を慎重に見極める姿勢が、より重要になっていくものと思われる。一部、編者・副題を略す。(同志社大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(現代)

藪崎 淳子

『國語と國文學』(99巻5号)は「これからの現代語文法」とする特集を組んでいる。その編集後記には「現代文法研究の歴史」を、古典語文法に「付随するもの」であった1980年代以前、「現代語文法が中心に躍り出て」文法現象の記述に「力が注がれてきた」1980年代以降、そして「文法現象がおよそ記述され尽くしたように思われる現在」とまとめ、「これから現代語文法はどのような方向を取ればよいのだろうか」と投げかける。同特集号の井上優「私の対照研究のやり方」では他言語の考察が日本語に関する新たな気付きにつながることを、定延利之「発話への文法的接近」では発話に注意を向けることで文法研究の知見を深められることを、森山卓郎「文法的文体論にむけて」では個別の文学作品の表現を文法的観点から考えることが作品の理解・教育に関わることを、それぞれ具体的に示し、他の領域の視点が現代語文法の研究に広さと深みをもたらすことを伝える。こうした他領域との関連付け以外にも、従来の現代語研究の視点を変え、広げようという動きがある。金澤裕之・山内博之編『一語から始める小さな日本語学』(ひつじ書房)は、17名の執筆者それぞれが違和感を抱いたり面白いと思ったりした一語を取り上げ、データをもとに記述をしている。例えば、知ってはいるけれどあまり口にする事のない「わーい」の使われ方を示したり(小西円「「わーい」っていつ使う?」)、「きっかり」が小学生になじみがない理由をコーパスの分析から明らかにしたり(中石ゆうこ「きっかり10時」)など、細分化し蓄積の多い文法研究の隙間を探すのではなく、実質語一語を究める形で「日本語学研究の新しい領域を開拓」することを企図している。また、佐藤琢三「叙述類型選択原理の諸相と展開可能性」(前掲『國語と國文學』)は、例えば「お茶が入ったよ」がどのような条件下で自然に捉えられるのか、叙述類型の選択に関わる要因について考察しており、文法形式の自然な運用には意味や構造の記述だけでは足りないことに気づかせる。前田直子「これからの現代語文法研究—コーパスの活用と日本語教育のための記述的文法研究—」(前掲『國語と國文學』)も、コーパスを使った数量的分析から日本語学習者にコストパフォーマンスのよい文法が提示できることを示し、記述的文法研究の新たな方向性を考えさせる。他領域との交渉や新たな視点が現代語研究に有用であることが知られるが、こうした新たな展開は精緻な文法記述の積み重ねの上に成り立っているとの思いも抱かせる。西畑宏紀「いわゆる詠嘆のモをめぐって」(『日本語文法』22巻2号)は「君もなかなかやるな」といったモについて、詠嘆の解釈が成立する条件や当該表現から感じる情意性の関係のみならず、並列のモとの関係にも説明を与えており、従来指摘されている現象の見直し・再考の必要性を再認識させる。蓮沼昭子「終助詞「や」の機能再考—「わ」との比較を通して—」(『日本語文法』22巻1号)、阿久澤弘陽「「つもりだ」の意味的特徴」(『日本語の研究』18巻1号)も、現代語研究を走らせる両輪の一方に、文法現象の記述があることを改めて実感させる。

(追手門学院大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究 (古典)

小池 博明

紙幅の関係から中古の和歌、その関連分野が中心となることを、予めお断りする。

中古文学・和歌文学の表現研究は、昭和40年代から盛んになった。それを牽引した1人が小町谷照彦氏であった。著書には未収録の論文が多かったが、この度、「小町谷照彦セレクション 全3巻」(花鳥社)が完結して、その研究の全容を一覧することが可能になった。編者倉田実氏の解説は、今後の表現研究を考える上でも有益である。

現在の研究に目を移せば、半沢幹一氏『古代歌謡表現史』(笠間書院)が注目される。比喩を観点とした和歌表現論だが、比喩の厳密な定義によって、比喩との関係から擬人法、序詞、見立て、古今集仮名序の表現性、表現史も明らかになる。第三章「歌謡語表現史」は、文学研究一般の分析方法とは異なる視点と方法による、新たな「歌ことば」論である。比喩は、本学会全国大会のシンポジウムのテーマであり、西山秀人氏「歌枕の喩性」(『表現研究』116)が、歌枕を比喩として捉え、古今集時代に完成した歌枕が、散文作品において比喩性を高めたと、興味深い指摘をする。

注釈書は、徳原茂実氏『後撰和歌集』、近藤みゆき氏・松本真奈美氏『後拾遺和歌集』(以上、明治書院)などが刊行された。前者は後撰集の性格から詞書なども全訳し、後者は松本氏に関わる再度の後拾遺集の注釈だけに、焦点を絞った説明がわかりやすい。筆者が和歌を読み始めた昭和50年代末は、八代集すら古今集と新古今集以外に近代の全註釈がなかった。表現研究とともに、和歌の解釈も進展したと言えよう。

もっとも、和歌研究が解釈の点で手薄だという指摘もある(長谷川哲夫氏「長谷川哲夫著『定家卿百番自歌合評釈』」。『和歌文学研究』125)。この背景に、小町谷氏の業績を象徴する「歌ことば」、すなわち自立語の研究の進展に比べて、自立語を関係づけ、統括する付属語や、構文・文章についての考察が十分でない点があるかと推察する。その点から、和歌に使用される「あさぼらけ」と「あけぼの」の差が、時間経過や視覚性といった語義によるのではなく、下接語(かな／の・に)などの表現形式によるとした、篠原美夏氏「和歌における『あさぼらけ』と『あけぼの』の差異について」(『詞林』72)は、注目される。また、荒井洋樹氏『紀貫之と和歌世界』(新典社。2023年刊)は、表現を歴史的、文化的要素と関連付けて論じ、助動詞など文法的要素にも目配りされている。文章では、散文だが、半沢氏『「枕草子」決めの一文』(新典社)が、冒頭文と末尾文の分析から、枕草子は無括型や散括型が典型とされる随筆ながら、類聚章段に典型的な頭括型タイプの文章であると明快に説く。

他に、森田直美氏『平安朝文学と色彩・染色・意匠』(新典社)は、通説の再考を迫る論が多い。吉井祥氏「平安和歌における『和す』」(『日本文学』71)は、近年進む和歌の伝達に関わる機能や表現の見直し(その中心が吉井氏)をさらに進める。異分野だが、井上泰至氏・堀切克洋氏『俳句がよくわかる文法講座』(文学通信)は、理論と実践(詠む／読む)のバランスが見事で、和歌の表現研究にも有益と見た。(長野高専)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(近代)

吉田 遼人

漠然と理解したつもりになっていた言葉や表現、ひいては作品／テキストが、それまでとは異なる相貌を呈しはじめること。対象と丹念に向き合った読解を通じ、そのような事態に気づかせてくれる論考に接すると、いつでも身の引き締まる思いがする。

齋藤樹里「太宰治「おさん」論——小春の欠如と見立てられた「おさん」——」(『日本文学』第71巻第6号、2022年6月)は、典拠となる「心中天網島」との比較をとおして、自身をおさんに「見立て」ようとする「私」の語りの指向性、そしてその理由を問うている。みずからを語る／騙る一人称表現に対する細心の考察から浮き彫りにされるのは、「夫」の心中に対して主体的でありたい「私」の姿であった。小説末尾における「夫」への「愛想尽かし」に注意が喚起されるとき、強く、たくましい女性と読まれてきた「私」の人物像が大きく変容する。こうした解釈の更新が、典拠および関連文献の調査に裏打ちされていたことも言い添えておきたい。

木下幸太「書かされる「私」たち——福永武彦『草の花』論——」(『文学・語学』第235号、2022年8月)は、ひとえに恋愛物語などと受容してしまうかぎりでは把握できないテキストの構造を、「登場人物たちによって反復される主題的な行為」、すなわち「死者を〈記憶する＝書く〉行為」への着眼をとおして、鮮やかに照らし出してみせた。『草の花』を生者と死者とが互いに影響し合いながら「共生してゆく物語」と捉え直すことにより、自律的な個人像には収まりえない「私」の存在様態についても論及する。精読と考察の帰結として「書かされる「私」たち」(傍点原文)と意義づけられる特徴的な主体のありようは、ことさら興味深く映る。

一篇の文学作品を緻密に読み解く試みがなされる傍らで、文学史あるいは表現史もまた、俎上に載せられている。

『物語の近代』(岩波書店、2020年)の兵藤裕己と『明治の表象空間』(新潮社、2014年)の松浦寿輝とによる対談「近代小説の文体、そして文学の可能性」(『図書』第877号、2022年1月)では、「ものがたり(物語)」という行為の相、「言文一致の功罪」をめぐる対話をとおして、近代文学の歴史の再考が促される。このとき糸口のひとつとして、泉鏡花の文体表現が見据えられていることは重く受けとめたい。

『日本近代文学』第106集(2022年5月)では、特集《文学史はどこから来て、どこへ行くのか》が組まれた。6本の論考が並ぶなか、わたし自身にとっては、「作者」主体を前提とするのではなく「作者の死」や「間テキスト」を前提にした歴史叙述の可能性を提示する永井聖剛「文学史の〈穴〉——主体と非主体とのあいだ——」が知的刺激に満ちていた。作中人物を惹きつける〈穴〉の機能を、中動態という概念を鍵としながら検討し、自由間接話法の問題をめぐる考察につなげてゆく。そのような視角のもとに、斬新な「表現・文体史」の輪郭が描き出されたためである。

以上、遺漏が多いが、2022年の研究動向の概観に代えたい。(愛知学院大学)

【表現学関連分野の研究動向】

国語教育

桃原 千英子

2022年度の国語科教育研究では、「マルチモダリティー」「コンピテンシー・ベース」「問い」に関する研究が多く見られた。今回、その中から表現研究に関わるものを紹介する。

全国大学国語教育学会編『国語科教育』第91集(2022.3)第92集(2022.9)では、シンポジウム「文章と図像との混成型テキストの学習を支援する、メタ言語の体系的導入の試み」(奥泉香、メアリー・メッケン=ホラリック、レン・アンズワース)が開かれた。また著作『書くことの力をはぐくむマルチモーダル・アプローチ—自己認識としてのメディア・リテラシーをめざして—』(松山雅子編著、2021、溪水社)など、言語と他要素との相互作用で構築される意味に着目した研究が進められた。表現指導に関する研究では「小学生における辞書引き活動の調査—辞書媒体による検索行動の差異および辞書内容の分析—」(長田友紀・小林祐美・矢澤真人)、「語彙学習力を育成する学習指導過程の開発」(萩中奈穂美)がある。読解指導に関する研究では「「複数の自己」への寛容を目指す文学の授業実践—戯文という方法論を用いて—」(山田深雪・河上裕太)、「教材の特性を生かした「学び」の授業開発—新美南吉『ごんぎつね』を例にして—」(中野登志美)が掲載され、教師の授業観や教材観が学習者の解釈過程に影響を与えていることが示された。

日本国語教育学会『月刊国語教育研究』では、特集「感性・情緒を育む「読むこと」の単元構想」No.608が組まれた。研究では「A・シュッツの現象学から見た『夢十夜』の世界—大学生の「第一夜」の読みをもとに」(拙稿) No.602、「マンガを活用した小説学習指導の有効性の検証—葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』—」(中野登志美) No.605、「「語り指導」の実践に関する研究—『研究集録』から実践を浮かび上がらせる試み—」(中村和弘) No.608が表現学に関わるものとなっている。

表現学会『表現研究』第116号(2022.10)では、「読みの交流と自己内対話—創作単元「雪」の詩を読もう」を基に—」(上月康弘)、教科書研究の「小学校教科書に埋もれた比喩の身体性」(鷲見幸美)、「「意見の述べ方」の教育についての日中比較—高校国語教科書に着目して—」(大野早苗・莊巖)、計3本の国語教育論文が掲載された。

明治図書『教育科学・国語教育』では、特集「徹底研究「ごんぎつね」「故郷」の授業」No.873で、言葉による見方・考え方(資質・能力)となる語りや視点、比喩・象徴表現の点から、教材研究の着眼点や発問が示されている。

書評で紹介された著作『高等学校国語科授業の探究—短歌の創作・鑑賞指導を求めて—』(青木雅一、2021、溪水社)は、短歌創作を軸とした授業方法が、自立した表現者を育成することを実証した、授業探究の記録である。「教材文への短歌的接近」は、表現行為の研究として注目すべき一冊である。

(沖繩国際大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本語教育

湯浅 千映子

2022年の日本語教育分野の表現学に関わる研究成果として、①アカデミック・ライティングや作文の評価研究、②やさしい日本語、③言語景観を取り上げる。

①では、学習者の作文評価の論文発表が活発な一年だったと言える。『早稲田日本語教育学』33号では、「ライティング評価の新潮流」の特集が組まれ、企画者の李在鎬(2022)によると、評価者の主観に基づく評価が妥当性と信頼性の面で課題が付きまとう問題を改善するため、2000年以降に様々な評価ツールが提案されたという。特集には「ループリック評価」(伊集院郁子2022)、「チェックリスト評価」(高野愛子2022)、「自己評価・ピア評価」(安高紀子2022)や「自動評価」(小森和子2022・李在鎬2022)の論文がある。また、評価者(教師)による作文評価のゆれに着目した研究として、トンプソン美恵子・影山陽子・坪根由香里・数野恵理(2022)「日本語母語話者教師・非母語話者教師がナラティブ作文評価で重視する項目」『日本語教育』183号と坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子・数野恵理(2022)「日本語母語話者教師による日本語ナラティブ作文の評価観点の違い」『社会言語科学』25巻1号がある。トンプソン他(2022)は、評価者間で、作文評価で重視する項目や上位作文の決め手とする項目が異なり、その異なりを踏まえた作文指導が必要になるという。

②の庵功雄編(2022)『「日本人の日本語」を考える: プレイン・ランゲージをめぐる』(丸善出版)は、第1章「日本語母語話者にとっての『やさしい日本語』: プレイン・ジャパニーズ」で、定住外国人などの言語的マイノリティのための言語保障の方策として発展してきた「やさしい日本語」の理念がマジョリティである日本語母語話者にも重要な意味を持つとし、日本語母語話者の意識にある「難しさへの信仰」を捨て、日本語表現の評価基準を「わかりやすさ」「論理性」に転換すべきだと主張する。ここでは、行政、医療、司法などの難解な原文と従来の「やさしい日本語(Easy Japanese)」の間の「中間言語としての「やさしい日本語」・「日本語母語話者に求められる日本語表現」として、「プレイン・ジャパニーズ(Plain Japanese)」を提唱する。災害時の減災のための取り組みとして始まった「やさしい日本語」は、四半世紀を経て、多文化共生社会の実現に向け、その対象や目的で新たな広がりを見せている。

近年、生教材としての③「言語景観」の利用が注目されている。ダニエル・ロング・斎藤敬太(2022)『言語景観から考える日本の言語環境—方言・多言語・日本語教育』(春風社)は、第IV部「教室における言語景観」で、看板や標識などの「公的空間で無意識に見る書記言語」である「言語景観」に見られる言語事象を、ディスカッションやアクティブラーニングの際に用いる取り組みを紹介している。ある広告ポスターの日本語教科書であまり扱わない表現(例「のまなきゃ」「飲んどかなくちゃ」)から文法的な変異形を学ぶことができるという。

(大阪観光大学)

【表現学関連分野の研究動向】

英語学

杉浦 秀行

2022年に出版された書籍の中で、最も特筆すべきものは、堀内ふみ野氏による『*English Prepositions in Usage Contexts: A Proposal for a Construction-Based Semantics*』（ひつじ書房）である。本書は、認知言語学を基本的な枠組みとし、なかでも、使用基盤モデルに依拠し、英語の前置詞について、コーパスデータを駆使しながら具体的な用例に基づいた分析・考察を行っている。従来の認知言語学の研究では、研究者の作例に基づき、イメージスキーマの変形や比喩的拡張を通じて前置詞単体の意味の多義性を記述していたのに対して、本書の使用基盤アプローチでは、複数のコーパス・データに基づき、構文的観点から前置詞の意味を捉え直すことを試みている。本書の独自性は、前置詞はそれ単体で意味が構成されるのではなく、具体的な言語使用コンテキストの中に埋め込まれ、その前後に共起する語と構文（コロケーションやイディオム、定型表現を含む）を形作ること、言わば構文の意味を構成しているという点である。

次に注目すべき書籍として、廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・長野明子編著『比較・対照言語研究の新たな展開—三層モデルによる広がりと深まり』（開拓社）を挙げたい。本書は2017年に出版された『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』（開拓社）の続編にあたる論文集である。三層モデルは、話し手を「思考・意識の主体としての私的自己」と「伝達・報告としての公的自己」に分け、言語使用を私的自己による状況把握や解釈を担う「状況把握」の層、状況把握した内容を公的自己によって聞き手に伝達する「状況報告」の層、そして公的自己による聞き手との対人調節をする「対人関係」の層という三層からなるという。これらの層の設定からわかるように、三層モデルは認知言語学と社会言語学・語用論を統合するモデルとして提案されている。本書は10篇の論文を掲載しているが、最初の3篇は日英語対照研究となっており、他者の言葉を相手に伝える主観の客体化問題、話法と時制、言いさし文について分析・考察が展開されている。

もう1つは、廣瀬浩三・松尾文子・西川真由美著『英語談話標識の姿』（ひつじ書房）を挙げたい。タイトルこそ専門家向けに書かれたように見えるが、本書は『ちょっとまじめに英語を学ぶシリーズ』の第5編で、一般の英語学習者向けに執筆された書籍である。「認知的」を「情動的」と言い換えたり、「相互作用的」を「対人関係的」と平易に置き換えて提示しつつも、専門家ならではの視点から、様々な談話標識の機能を詳らかにしている。具体的な用例は映画の台本や小説などが多く、一般の読者には身近に感じられ、学習意欲を高めることが期待できる。また、最終章では、Brown & Levinson (1978/1987) のポライトネス理論に踏み込んで、専門的な観点から談話標識の役割を解説しているが、極めて明快かつ行き届いた解説となっており、ここまで本書を読み進めた読者であれば、知的好奇心をくすぐられるはずである。（同志社大学）

【表現学関連分野の研究動向】

認知言語学

野村 佑子

ここ数年の認知言語学の動向について、認知言語学のこれまでの知見を整理し根本的に問いただすことと、その知見をより具体的に生かすことの2点が言及されてきた。これらは、実際に、認知言語学の歴史的・学問的背景を丁寧に解説し、関連分野に対し知見を示した『言語学と科学革命』（山梨正明著、2021年、ひつじ書房）や、活躍する研究者たちがそれぞれの研究活動の最新の知見をまとめた『認知言語学の最前線』（児玉一宏・小山哲春（編）、2021年、ひつじ書房）の出版に見られるように、認知言語学分野において注目された良書の中で、実現されてきた。本稿では、その後、2022年にどのように展開していったかについて、1冊の大作を中心に挙げながら述べる。

『認知言語学の未来に向けて』（菅井三実・八木橋宏勇（編）、2022年、開拓社）は、33本の論稿が納められた、大規模な一冊である。本書では、認知言語学が実際にその知見を生かして他分野とも協働できることが、実例をもって示されている。池上嘉彦氏の「言語横断的に見た日本語動詞『なる』の生態（中間報告）」と山梨正明氏の「文学表現における描写の諸相—自然描写・情景描写を中心に—」を「巻頭論文」として始まり、「形と意味」（第一部）、「ことばの意味」（第二部）、「ことばと心」（第三部）、「ことばの振る舞い」（第四部）、「ことばの姿」（第五部）と5部で展開されたのち、最後の第六部「回顧と展望」で締めくくられる。納められた論文は、読者に、特に言語の研究をする者に、言語表現が意味を持つ様を多角的に検討することの面白さを改めて感じさせて魅了すると同時に、そのトピックや分析の観点の多様さから、今後こうした研究が積み重なることで、認知言語学が学際的に発展することを期待させる。言語研究者だけでなく、他領域の研究者による論文も掲載されており、実際に認知言語学が医学、神経心理学、情報工学などの他分野との共同研究が可能であることも示している。

また、2022年は、日本認知言語学会が、若手や中堅の研究者を主な対象とする「チュートリアル」を開始した年でもあり、第1回は辻幸夫氏と佐治伸郎氏が講師を務めた。チュートリアルでは、辻氏が認知科学としての言語研究の学際性について、佐治氏が認知科学と認知言語学のアプローチの共通基盤についてを中心に、参加者に向けて講義を行った。特に、研究対象や分析方法を「言語学の範囲か否か」で限定せず、他分野の研究者との共同研究を積極的に進めることについても言及があり、このことは、認知言語学やその関連分野の研究者たちが、今後自身の研究において重要となる基本について学びつつ、発展の方向性として学際性を重視することの魅力を改めて知る機会となった。

以上から、認知言語学分野は今後、より具体的に他分野と関わりを持ち、可能性を広げていくことが期待される。

(順天堂大学)

【表現学関連分野の研究動向】

修辞学

松浦 光

2022年は修辞学にとって、多岐に渡る研究成果に恵まれた1年であると言える。各学会でレトリックをテーマにした研究報告が盛んに行われた。表現学会 第59回全国大会(於 京都橘大学)においても、シンポジウム「比喩の身体性と知性」(登壇者:野田大志氏・小松原哲太氏・鷲見幸美氏・西山秀人氏)が開催された。本シンポジウムでは「比喩」における「身体性」と「知性」の位置づけについて、認知言語学・日本語教育学・日本文学というそれぞれの分野から議論が行われた。各氏の論考は『表現研究』第116号にまとめられている。また、2019年末から続くコロナ禍における言語表現についても研究対象となり、その実態を後世に伝える言語資料にもなり得るだろう。『日本語学』第41巻第3号秋号(明治書院)で組まれた特集「コロナが変えた日本語」も時代を反映したものととなっている。梶原彩子・陳帥・松浦光・菊地礼「新型コロナウイルスに対する百科事典的知識の形成—「ウィズコロナ」「アフターコロナ」の用法拡大の考察から—」(『表現研究』115)では「ウィズコロナ」「アフターコロナ」の二語を取り上げ、新型コロナウイルスに関する社会的出来事から百科事典的知識の形成と変容について記述されている。小松原哲太「矛盾する比喩と社会的葛藤—日本語における「コロナ禍」の概念メタファーの不和—」(『社会言語科学』25(1))は概念メタファーから、商売を営む事業従事者は「コロナと戦う」ために営業を自粛するか「生き残る」ために営業を継続するかに関しての葛藤が論じられている。さらに、本年はレトリックを再考・整理する研究が積極的に行われた。むだ口にみられる擬人法あるいは誇張法を指摘した粕山洋介「ことば遊びとレトリック—日本語のむだ口を中心に—」(『認知言語学研究』7)、コーパスを用いて直喩の程度表現としての働きを実証的に提示した菊地礼「直喩における程度表現の働き」(『表現研究』115)、プライマリー・メタファーはじめ身体性と言葉の関係を論じた沖本正憲『東京は砂漠なのか—メタファーからことばを考える』(三恵社)などに、新たな知見を見出すことができる。

今後の修辞学の展望としても、レトリックの定説が見直され、発展に向けて議論されていくだろう。特に、佐藤信夫の一連の研究は重要な位置を占める。菅井三実・八木橋宏男(編)『認知言語学の未来に向けて—辻幸夫教授退職記念論文集』(開拓社)の中の一編である森雄一「埋もれた名著 高部伸夫著『広告コピーのレトリック その発想と表現技術』を読む」では、佐藤の別名義である高部伸夫の1966年の著書の概略を示し、佐藤のレトリック論の展開が考察されている。瀬戸賢一・宮畑一範・小倉雅明(編著)『[例解] 現代レトリック事典』(大修館書店)も、文学作品をはじめ漫画や広告など幅広い実例に基づきレトリックを「意味のあや」「形式のあや」「思考のあや」から分類を試みた1冊である。「本書は、日本で最初のレトリシャン佐藤信夫(1932-93)の学問的遺産を受け継いで自由に発展させたレトリック事典です。」(同上: 584)という「あとがき」からも佐藤の影響がうかがえるのも興味深い。(横浜国立大学(非))

【表現学関連分野の研究動向】

文章・談話研究

定延 利之

視野のせまい評者の目で見ても、2022年は良書の出版が相次いだ。その一部のリストを末尾に付す。以下、特に若い研究者向けに、各々手短に紹介する。

①は『表現の愉楽』『題名の愉楽』と続いた「愉楽」シリーズの最終巻。この語りは達人の語りなので、真似しようとはせず、素直に楽しみ、うらやましがろう。②は味に関するメディア～レトリック論集。こんなキャラだったのかと驚くような編者のポップな語り口は、執筆者の一人である山口治彦氏の影響か。③は入門書だが最先端の情報が盛り込まれており極めて有益。④はマンガシリーズ最終巻。マンガというメディアだけでなく、マンガの中の言語に対する我々の理解を深めてくれる点では②と通じる。⑤は依頼というコミュニケーション行動の言語文化的な広がりや奥行きを教えてくれる。⑥は日常会話における「いい加減なことば」の実相を的確に述べている。⑦は雑談の指導書だが考えさせられる記述が随所にあり、分析として十分読める。ゴレンジャーよろしく[青]に続く第2弾である（これも「題名の愉楽」か）。⑧は「文化と言語使用」シリーズの第3弾。「文章・談話」の研究者なら気になっているはずの諸現象をまるごと説明する概念として提案されている「場」に関する、わかりやすい解説を含む。⑨は言語学者が避けに避けてきた「言語外世界」を直視するもの。⑩はコミュニケーションの基礎的論考で、「倫理倫理」していない。⑧⑨⑩を「別分野」として除外するなら「文章・談話研究」に未来はない。以上、重要な研究の見落とし、見当違いの取り上げ方、事実の誤認など、あればご寛恕を乞うしかない。

若い研究者のために、なお付言すれば、これらの多くは「周辺の」な現象を扱っているが、これは、従来の研究枠組みの限界を探るために、軽視・無視され「周辺」に追いやられている現象に敢えて光を当てているものである。中核的な諸現象があらかた解明されてしまったので仕方なく落ち穂拾いのように周辺を考察しているわけではない。研究枠組みの改変へと向かう根本的な問題意識を持つことが重要である。この問題意識がなければ、周辺の現象の研究は、文字どおり「周辺の研究者の周辺の趣味の研究」と片付けられてしまう。（それで何が悪いと聞き直るのは三十年早い。）

①はんざわかんいち『語りの愉楽』（明治書院）／②瀬戸賢一（編）『おいしい味の表現術』（集英社）／③秋田喜美『オノマトペの認知科学』（新曜社）／④鈴木雅雄・中田健太郎（編）『マンガメディア文化論：フレームを越えて生きる方法』（水声社）／⑤沖裕子・姜錫祐・趙華敏『日韓対照 依頼談話の発想と表現』（和泉書院）／⑥堤良一『いい加減な日本語』（凡人社）／⑦西郷英樹・清水崇文『日本語雑談マスター[黄]：英語中国語韓国語対訳付』（凡人社）／⑧井出祥子・藤井洋子（監修）、岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子（編）『場と言語・コミュニケーション』（ひつじ書房）／⑨伝康晴・前川喜久雄・坂井田留衣（監修）、牧野逸作・砂川千穂・徳永弘子（編）『外界と対峙する』（ひつじ書房）／⑩水谷雅彦『共に在ること：会話と社交の倫理学』（岩波書店）（京都大学）